

ビジネス英語「論理・表現」授業への示唆：オックスフォード・ユニオンのディベート分析

中谷安男

1 はじめに

ビジネスのグローバル化が進む中で、英語を積極的に活用できる能力の必要性が認められている (Daniels, et al., 2021)。特に日本企業は、国内市場が縮小する中で、海外におけるビジネス活動がさらに拡大していく (吉原・岡部・澤木, 2001)。この際、ビジネス交渉の主な使用言語は英語であり、その効果的なCommunication Strategy: CSを駆使できることが必須となる (Bhatia, 2008)。このようなビジネス現場の英語活用の調査を行った多くの研究がある (例 Maes, et al., 1997)。また、英語プレゼンテーションにおけるCS活用認識の実態を調査した研究もある (Nakatani, 2016)。これらの先行研究は、ビジネス交渉における英語活用の状況を明らかにする上で、様々な示唆を与えている (Mayfield, et al., 2014)。

一方で、実際のビジネス場面で英語が使えるようになるための効果的な教授法については、十分な考察が行われていない (例 中谷, 2022)。また、どのような学習法がビジネス英語力の向上に適しているのかの検証も少ない。

現在、日本の英語教育において、「論理・表現」の育成の重要性が主張されており、文部科学省の指導要領にも明確に取り入れられた。しかし、具体的にどのような学習を日本で行えば、論理的な英語表現ができるのかは

明確ではない。一つの方法として、日本の学習者にも早い段階から英語によるディベートの導入が提案されている。後ほど詳細に確認するが、ディベート活動には様々なスキルが必要とされ、学習者が論理的な思考を身に着けるのに最適な学習方法である（中谷, 2020b）。これが適切に取り入れられれば、英語力の向上も望める（中谷, 2021a）。

以上のことから、本論ではグローバルビジネスの交渉に必要なCSを育成するために、日本の学習者にかなる英語ディベートのトレーニングを行えばよいかについて考察を行う。このために、ディベートの世界最大の組織であるOxford Union (OU) における学習方法を確認する。これはオックスフォード大学の学生が主催する団体で、現役の世界のリーダーを招き、学期中の木曜日にフォーマル・ディベートを実施している。ここでは初心者向けにもトレーニングセッションが開かれ、配布されるテキストなどを基に、丁寧な指導が行われている。本論では、ここで導入されている学習方法を例示し、その成果が実際のディベートにおいて、いかに実現されているのか検証する。具体的には、収録されたフォーマル・ディベートをテキストデータに変換しコーパスを作成する。このコーパスデータの中で、OUの初心者向けトレーニング手法の成果を抽出していく。このことにより、日本のビジネスパーソンや英語学習にとって、有効な学習方法と効果的なCSの活用方法に関する示唆を行う。

2 研究の背景

この章では、本研究の対象となるディベート学習の有効性と、OU及びそこで行われているディベートに関して確認する。

2.1 日本の英語教育における論理・表現

日本の英語教育の問題点として、大学受験や資格試験で良い結果を得ることが多くの学習者の主な目的となっている（嶋内, 2012; 佐藤, 2017）。こ

のため、それらに出題される形式や内容に沿って教育機関などで学ぶため、英語を実際の場面に沿って活用することが困難である (Nakatani, 2010)。この問題を解決するために、文部科学省は英語学習の指導要領をコミュニケーション能力の向上が可能になるように改変してきた。文部科学省は2018年3月に、『新高等学校学習指導要領』を公示し、これまでの「コミュニケーション英語」「英語表現」「英語会話」に代わり「英語コミュニケーション」と「論理・表現」の2科目の新設を決めた。¹

「論理・表現」の科目は、英語によるスピーチやプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどを通じて英語のアウトプットの強化を目指す。しかし英語ディベートに関しては、具体的にどのような指導を行えばよいのか、あまり明確になっていない。

大学受験や資格試験の取得を目標とするのではなく、実際の活用場面に沿った学習者の最終的な到達目標としてEUでCEFRが開発された (中谷, 2010)。また日本では、下位レベルの学習者にも詳細に対処すべくCEFR-Jが開発された (Nakatani, 2016)。CEFRの上位のCレベルでは、実際のビジネスにおける目標言語の活用能力に関しても明確な記述があり、日本の英語学習者もこれに沿ってトレーニングしていくことが望ましい (中谷, 2016)。このCEFRの上位レベルでは、論理的な表現を学ぶための指針が明示されている。ここでは目標言語による交渉に必要なCS習得のために有効な学習方法として英語ディベートが提案されている (中谷, 2021b)。

以上のことから、日本のビジネスパーソンが現場で活用できる十分な英語力を身につけるためには、ディベートトレーニングを通してCEFRの上位の到達目標を目指すことは有効であろう。

2.2 Oxford Union (OU) のフォーマル・ディベート

1823年にOUは学生によるディベート組織として設立された (Graham, 1988)。ここでは、毎学期中の木曜日にフォーマル・ディベートが行われる。このディベートには、社会の第一線で活躍する政治家、実業家、芸術

家等が登壇し、学生と討議を行う (Walter, 1984)。これまでOUのディベートは社会を変える影響を与えたと考えられている (中谷, 2020a)。例えば、過激な黒人指導者のマルコムXが招かれディベートを行った。これが全英にテレビ放映され、人種問題の深刻さを白人社会に認識させた (Hughes & Phillips, 2000)。また、1933年には“King and Country”のディベートが開かれ、「国王と国家のために戦わない」という動議が採択された。この結果を知り、ヒトラーやムッソリーニがヨーロッパ侵攻を決意したという伝説がある (Ceadel, 1979)。現在も、このOUフォーマル・ディベートは注目度が高く、YouTubeなどで配信され、世界中の関心を集めている (中谷, 2020b)。

2.3 Oxford Union (OU) のディベートトレーニング

OUのフォーマル・ディベート参加を目標に、世界中の学生がオックスフォード大学で学ぶことを目指している。ディベートにはいくつかの種類があるが、世界大学学生ディベート選手権 (World Universities Debating Championship : WUDC) では英国議会のパラメント・ディベート形式で行われる (中谷, 2022)。これは、毎年50ヵ国以上から大学生が参加する大規模な大会で、2020年、2023年はOUのチームが優勝している。

しかしOUのメンバー全員が中学・高校時代からディベートを経験しているわけではない。オックスフォード入学後に、この活動に取り組む者も少なくない。このため、OUでは学期中に大学選手権で活躍する上級生が、下級生のために毎週トレーニングセッションを開催している (中谷, 2021b)。このセッションは、初級、中級、上級とレベルに分かれており、それぞれのグループが毎週のテーマに沿ってワークショップを体験し、疑似的なディベートを行う。これまで、OUにおいてどのようなトレーニングが行われているのかに関して、あまり詳細な報告がなかった (中谷, 2020)。このため、本論では、初級レベルのトレーニングに注目し、そこで具体的にどのような教材が使われているのか報告する。また、そのトレーニングの成

果が、実際のフォーマル・ディベートでどのように活用されているのかを検証する。今回の考察では、ワークショップ参加者に配布されるガイドブックである*The Oxford Union Guide To Schools' Debating*に記載のトレーニング方法に注目する (Hughes and Phillips, 2000)。

この書籍の中で重要視されているのは、ディベートのスピーチをSEXIの順に構成する戦略である。SEXIとはStatement, Explain, Illustrateの略語で効果的に聴衆を説得することが可能とされている。具体的にはこの戦略について、ガイドブックには以下のような記載がある。

“One useful technique for thinking about arguments is known as SEXI. It stands for State, EXplain and Illustrate. ‘State’ means simply to say what your team believes, ‘EXplain’ means providing the logic and reasoning for why that statement is true and ‘Illustrate’ means providing evidence to show that the ‘EXplanation’ is not just theoretical but that there are instances where it is so. The illustration could be in the form of statistics, an example of where a policy has been implemented elsewhere in the world or a comparison to another policy that is successful.” (p.15)

OUでは、このSEXIを確立できるようにディベートのトレーニングに取り組んでいる。しかし、これらの戦略が具体的にどのような形で発話に表れているのか検証した研究はほとんどない。

以上のことから本論では、実際のOUのフォーマル・ディベートを収録し確認する。具体的にはスピーチをスクリプトに変換し、コーパスデータを作成する。これを参照コーパスと比較することによって、特徴語表現の抽出を試みる。その際に以下のような研究仮説を設定する。

仮説1 OUにおけるディベーターは特徴的なCS表現を使う

仮説2 OUのディベートではSEXIの戦略が活用されている

3 研究

2章で提示した2つの仮説を検証するために、次のようなコーパスデータ分析に基づく研究手法を導入する。

3.1 コーパス分析

コーパスデータ分析は、文章や発話をスクリプト化したテキストデータを対象とする。このコーパスに対してコンコーダンス・ソフト等を活用し、統計的手法で語彙の使用頻度やクラスター表現などを抽出する。(Biber, Conrad and Leech, 2002)。一般に、より規模の大きなデータを分析することで、より正確な結果を得られるとされている(Nelson, 2006)。今回は既存では行われていないディベートのコーパス分析の初期的な検証ということで、大規模のデータを扱わない点を考慮すべきである。

3.1.1 OUDC

研究対象とする目標コーパス(Target Corpus)のOXUDCは、2015年から2022年の学期中にOUにおいて行われたフォーマル・ディベートの中で無作為に抽出した21人の発話データを基にしている。参加者の内訳は学生12人、社会リーダー9人となっている。1人当たり13-16分のディベートで、合計38,099ワードのコーパスである。

3.1.2 参照コーパス

OUDCの特徴語分析を行うために、本研究では参照コーパス(Reference Corpus)として、英語の書きことば100万ワード以上を収集した以下の2つを活用した。英国英語の書き言葉コーパスFLOB(The Freiburg-LOB Corpus of British English)と米国書き言葉のFROWN(The Freiburg update of the Brown corpus)である。両コーパスは1990年代から収集された代表的な英語の大規模コーパスとしてみなされている。これらと目標コーパス

における使用頻度を比べることで特徴語を抽出することができる (Hunston, 2002)。

3.2 分析方法

3.2.1 ワードリスト

コンコーダンス・ソフトAntConc 4.0.10を使い、OUDCと参照コーパスそれぞれのワードリストを作成した。ワードリストは、該当コーパスにおける使用頻度の高いワード順に並べたものである。だが特定のコーパスのワードリストの使用頻度の高いものが、必ずしも特徴語とは言えない。参照コーパスにおける使用頻度との比較検証により、特定の語彙が相対的に頻度が高いとみなせる。このような2つのコーパスにおける語彙の使用頻度を比較検証することで、目標コーパスの特徴語を抽出する手法がKeyword分析である。

3.2.2 Keyword 分析

AntConcの特徴語機能を活用し、OUDCのKeyword分析を行った。各語彙の頻度を参照コーパスFLOBとFROWNコーパスに対して比較した。先行研究に従いLog-Likelihood検定で特徴語棄却率 $p < 0.05$ の確率を設定した (Nelson, 2006)。この際に指標となるのがKeynessで、一般にこの値が15.13以上あれば、 $p < 0.05$ で統計的に有意な特徴語と見なせる。

3.2.3 クラスタ分析とプロット分析

Keyword分析により抽出された特徴語に対してクラスタ分析を行った。この分析により、特定の語彙を含む結びつきの強いフレーズの抽出が可能になる。語彙からフレーズへ拡張で使用の意味やCSとしての用法がより明確になる。これらの特定のクラスタの発話における位置情報を検証するプロット分析により、CSが各ディベートどの位置で活用されている

の明らかになる。さらに、どのパラグラフのいかなるコンテキストで使われているのか把握できる。

4 結果

この章では、OUDC21名による38,099語のコーパス・ワードリスト、特徴語及びクラスター分析の結果を示す。

4.1 OUDCのワードリスト

表1にOUDCのワードリストで上位15までを掲載している。なお、付表1には30位まで掲載している。この表のRankは頻度の高い順である。Typeは抽出された語彙となり、FrequencyはOUDCコーパスにおいて使用された頻度を示す。Rankの1位はtheで、頻度は1891である。Rangeはその語が使用されている人数である。

通常の書き言葉のコーパスにおいて、使用頻度が最も高いのは定冠詞のtheである（中谷, 2023）。今回の結果では、ディベートの話し言葉でもやはりtheの使用が最も頻度の高いことが分かった。

2番目に使用回数の多いのはtoで1235回使用されている。以下、of, andとなっている。これらは機能語（Function Word）であり、文の構成要素として使用され、それ自体は単体では特に意味を持たない。

内容語（Content Word）としては、Rank 5に that, Rank 8にI, Rank 11にyouなどが抽出された。先述のように、ワードリストはあくまで目標コーパスの中で頻度の高い語彙ということで、必ずしもディベーターが活用する特徴語とは言えない。

このため、参照コーパスのワードリストと比較検証する必要がある。

表1 OUDCのワードリスト

| Rank | Type | Frequency | range |
|------|------|-----------|-------|
| 1 | the | 1891 | 21 |
| 2 | to | 1235 | 21 |
| 3 | of | 1126 | 21 |
| 4 | and | 1092 | 21 |
| 5 | that | 807 | 21 |
| 6 | a | 772 | 21 |
| 7 | in | 668 | 21 |
| 8 | I | 629 | 21 |
| 9 | is | 617 | 21 |
| 10 | it | 536 | 21 |
| 11 | you | 497 | 21 |
| 12 | we | 493 | 21 |
| 13 | this | 389 | 21 |
| 14 | for | 351 | 21 |
| 15 | are | 312 | 21 |

4.2 OUDCの特徴語分析

表2は、OUDCの38,099ワードを目標コーパスとし、FLOBとFROWNを参照コーパスとして特徴語分析を行った結果であり、上位20語までを掲載している。

表2の左側の数字は、特徴語として顕著な語彙の順番である。Typeは特徴語を示し、Freq_Tarは目標コーパス(Target Corpus)での出現回数(Frequency)で、Freq_Refは参照コーパス(Reference Corpus)での出現頻度である。右端欄のLikelihoodがLog-Likelihood検定結果のKeynessであり、ランクの上位から値の大きい順に並んでいる。尚、参考までにOUディベーターの特徴語の上位30までを付表2に掲載している。

表2 OUディベーターの特徴語分析結果

| Rank | Type | Freq_Tar | Freq_Ref | Likelihood | Range_Tar |
|------|-------------|----------|----------|------------|-----------|
| 1 | we | 493 | 3001 | 793.687 | 21 |
| 2 | you | 497 | 4775 | 480.494 | 21 |
| 3 | I | 629 | 7451 | 442.938 | 21 |
| 4 | that | 807 | 11623 | 391.06 | 21 |
| 5 | this | 389 | 4382 | 296.697 | 21 |
| 6 | thank | 66 | 66 | 282.898 | 21 |
| 7 | motion | 50 | 30 | 245.849 | 14 |
| 8 | proposition | 42 | 17 | 224.06 | 16 |
| 9 | is | 617 | 10454 | 199.294 | 21 |
| 10 | tonight | 49 | 58 | 198.844 | 12 |
| 11 | think | 111 | 672 | 178.884 | 19 |
| 12 | poi | 25 | 0 | 174.913 | 15 |
| 13 | people | 145 | 1214 | 166.4 | 20 |
| 14 | it | 536 | 9414 | 155.715 | 21 |
| 15 | to | 1235 | 27174 | 153.24 | 21 |
| 16 | debate | 46 | 100 | 146.059 | 14 |
| 17 | do | 158 | 1574 | 144.611 | 20 |
| 18 | so | 192 | 2181 | 144.069 | 20 |
| 19 | what | 196 | 2264 | 143.092 | 21 |
| 20 | okay | 35 | 43 | 140.218 | 7 |

Rankの1位はweであり、OUDCのコーパスで493回使用されている。このweは参照コーパスで3001回使われている。Freq_Refの数値が大きくても、Keynessが793.687と高いのは、参照コーパスのサイズが大きいためである。この値が15.13以上あれば、統計的に有意な特徴語と見なせるので、weはかなり際立った語彙と言える。分析結果のRankの2はyouでOUDCにおいて497回使用されている。また3位はIで629回抽出された。

ビジネスリーダーのプレゼンテーションを検証した中谷（2016）の研究でも特徴語として、I, we, youなどの人称代名詞の活用が示されている。ディベートにおいても同様の活用が示された。この結果は、これまでの研究で報告はない重要な成果と言える。

紙面の制限から全ての特徴語に関して考察を行うことは難しい。Nakatni（2023）ではweの詳細な分析を行っている。このため、本論では、特徴語

youに焦点を当て、クラスター分析などを行った結果を考察する。

4.3 OUDCの特徴語youのクラスター分析

AntConcの分析機能を活用し、ディベーターの特徴語youのクラスターを抽出した。この結果の上位10の表現を表3にまとめている。Rangeはその語が使用されている人数である。尚、付表3にyouのクラスター表現で20位までを掲載している。

表3 OUDCの特徴語youのクラスター分析結果

| Rank | Cluster | Freq | Range |
|------|------------------|------|-------|
| 1 | you very much | 14 | 8 |
| 2 | you have to | 5 | 2 |
| 2 | you'll see | 5 | 1 |
| 2 | you my president | 5 | 5 |
| 5 | you didn't | 4 | 3 |
| 5 | you don't | 4 | 2 |
| 5 | you know it | 4 | 3 |
| 5 | you vote for | 4 | 1 |
| 5 | you want to | 4 | 4 |
| 5 | you've got | 4 | 2 |

ディベーターの使用頻度の高い順で1位はyou very muchであり、頻度はFreqの欄で示された14回である。続いて使用が多いのはyou have to, you'll see, you my president の5回となっている。その次に頻度が高いのは4回抽出されたyou didn't, you don't, you know it, you vote for, you want to, you've gotとなっている。

4.4 クラスター表現を含んだ具体的なCS

クラスター分析の結果で最も頻度の高いyou very muchは、ディベートの最後に、聴衆に礼を述べる“Thank you very much.”の一部である。必ずしもCSを活用したものとは言えない。このため本論は、2番目に頻出の多い

you have toと, you will see の省略形であるyou'll seeに注目して考察を行う。

4.4.1 you have to クラスター

you have toの具体的使用例を見ていく。次の例1は、Big Tech Debate というITのプラットフォーム企業の活動に関する動議のディベートである。ここではyou have toのクラスター表現を使い、聴衆が決定をする必要があることをStatementしている。

例2は Social Responsibility in Businessというビジネスの社会的責任に関する動議を扱ったもので、同じくStatementを行っている。you have toのクラスター表現で、反対派が賛成側の基準に従ってディベートを進める必要があるという声明をしている。

例1 You have to decide whether your vision of responsibility mirrors
(Big Tech Debate)

Statement 声明

例2 But we set the standards for that and you have to follow them.
(Social Responsibility in Business)

Statement 声明

次の例3は、例1と同じBig Tech Debateで別のディベーターによる発話である。最初の文ではYou don't have toという表現で、我々に制限をかける必要はないという声明をしている。そして次の文ではWhy don't you have to という表現で、理由を説明している。

例4は、Britain Should be Ashamed Churchillという動議で、かつてナチスドイツに対抗し連合軍を勝利に導いた英雄の失策についての動議である。1943年に300万人が餓死したベンガル飢饉の責任はチャーチルにあるという指摘に関連するディベートである。

例3 You don't have to regulate us.

Statement 声明

Why don't you have to regulate us because we switched off the…
(Big Tech Debate)

Explain 説明

例4 we have to make it happen and that's why you have to support the proposition. (Britain Should be Ashamed Churchill)

Explain 説明

次の例は、例2と同じ動議のディベートで活用された表現である。you have to listenと述べて、具体的な指示として聴衆が聞くようにすることを例証している。

例5 they can tell you to put your hand down and you have to listen. If you would like to make… (Social Responsibility in Business)

Illustrate 例証

4.4.2 you'll see クラスタ

例6はMBA DebateのCS表現で、組織に賛成派と反対派があることによって、事象が自明であることを説明している。

例6 …be self-evident by the virtue of the setup, you'll see there is a proposition bench and opposition

(MBA Debate)

Explain 説明

例7ではSocial Responsibility in Businessにおいてyou will seeの省略形であるyou'll seeクラスターを使い、聴衆に英国国会の労働党側の席について例証している。

同じく例8もSocial Responsibility in Businessのディバートでyou'll seeを活用して街の目抜き通りであるhigh streetの例証を行っている。

例7 …a Labour bench in the House of Commons. And crucially you'll see two dispatch boxes; these sort to strange…

(Social Responsibility in Business)

Illustrate 例証

例8 …out on the high street and you can see today, you'll see a pink building and a blue building…

(Social Responsibility in Business)

Illustrate 例証

4.5 プロット分析の例

表3で示されたクラスター表現についてAntConcを活用し、各ディベーターの発話コーパスに戻り、どの位置でいかに使われているのか確認した。この結果、どの表現がSEXIのどのCSをどこで活用されているのかが明示される。

図 1 You have toのプロット分析結果例

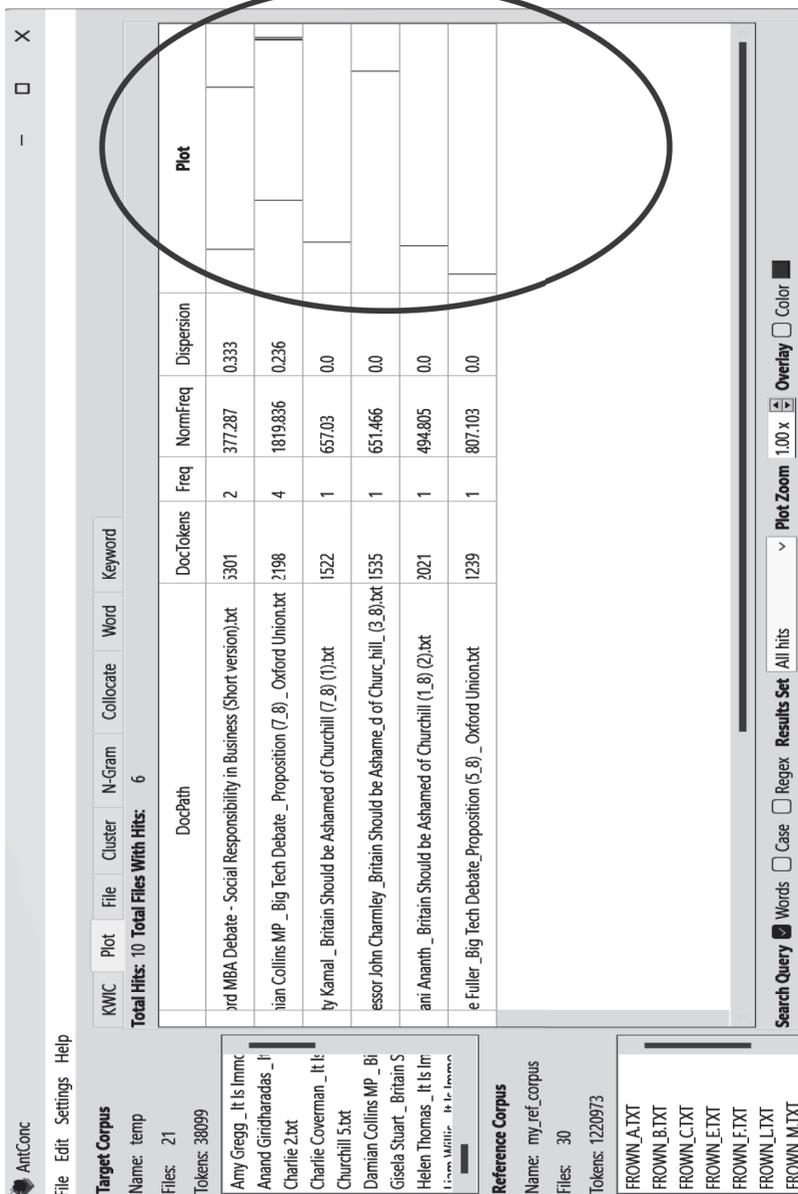


図1はAntConcを使ったyou have toクラスターのプロット分析結果を示している。右側の楕円で囲まれ部分に注目すると、Plotと書かれている所の各段の長方形が各スピーチの全範囲である。ここに縦線が引かれている場所が、you have toが具体的に使用された場所を示している。

このような分析結果を活用することで、該当表現の位置情報が分かり、SEXIのどの戦略が使われているのかより明らかになった。

5 考察

先行研究では、ディベーターは聴衆を説得するために積極的にCSを活用し、共感を呼び、課題を納得させ、行動を促すことが報告されていた。また、このために実際のスピーチにおいて、特定のCSを運用することが必要と考えられている(Almaghouth, 2022 ; Locker and Kaczmarek, 2013)。しかしながら、既存では上位レベルのディベーターが具体的にどのような特徴的なCSを使っているのか、信頼性のある分析方法で調査を行った研究はほとんどない。

本論では、ディベートの最大機関であるOUのフォーマル・ディベートにおける21人のスピーカーをランダムに選び録音した。この音声をスクリプト化し38,099ワードのコーパスOUDCを構築した。このコーパスのワードリストを作り、参照コーパスであるFLOBとFROWNのワードリストに対して特徴語分析を行った。

特徴語棄却率 $p < 0.05$ の確率に設定してOUディベーターの使用頻度の高い様々な語彙を抽出することができた。この中で、人称代名詞のwe, you, Iなどがよく使われていることが分かった。この結果、仮説1「OUにおけるディベーターは特徴的なCS表現を使う」が支持された。この結果は、中谷(2016)のビジネス英語プレゼンテーションに関するコーパス分析結果でも同様のことが示唆されている。このことからスピーチにおける重要な語彙は、共通なものが多いことが示めされた。

さらに、OUDCの特徴語の中でyouの活用法に注目し、この特徴語のクラスター表現を抽出した。これらの代表的な表現が、実際のコーパスでどのように使われているのか検証した。

特徴的なyouのクラスター表現には、you have to, you'll see等が抽出された。これらの表現のコンコダンスとプロット分析結果により、OUのディベーターのCSが明らかになった。彼らは、これらクラスター表現を効果的に活用し、Statement (声明), Explain (説明), Illustrate (例証) の流れでSEXIを構築している。この結果から、仮説2「OUのディベートではSEXIの戦略が活用されている」が立証できた。

このことは、英語ディベートのトレーニングとして、SEXIに関連するCS表現を使えるように積極的に取り入れることに意義があると言える。

今後の研究課題として、いくつかの観点が考えられる。まず、今回は紙面の制限から、特徴語のyouのクラスター分析のみを実施した。表2に掲載した他の特徴語のクラスター分析を進めることで、より詳細なCSの検証が可能になる。

さらに、本論はOUのディベーター21名の比較的小さな規模のコーパス分析である。今後より多くのデータを収集し分析することで、ディベートに必須なSEXIのCSがより明らかになるであろう。

いずれにせよ、本論の結果がこれまで英語ディベートトレーニングが困難だと考えられていた日本の教育現場への提言となれば幸いである。

謝辞

本研究はJSPS 科研費基盤研究 (C) 23K00684研究代表者 中谷安男の助成を受けたものです。

注

- 1 文部科学省 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 平成 30年 7月』

参考文献

- Almaghlouth, S. (2022) Deconstructing agency in the G20 leaders' declarations in the last decade: A corpus-assisted discourse study. *Helyon*, 8, 1-12.
- Bhatia, V. K. (2008) Genre analysis, ESP and professional practice. *English for Specific Purposes*, 27, 161-74.
- Biber, D., Conrad, S., and Leech, G. (2002) *Student Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Ceadel, M. (1979) The 'King and Country' Debate, 1933: Student Politics, Pacifism and the Dictators. *The Historical Journal*, 22-2, 397-422.
- Daniels, J., Radebaugh, L., and Sullivan, D. (2021) *International Business, Global Edition*. Pearson Education Limited.
- Graham, F. (2005) *Playing at Politics*. Edinburgh: Dunedin Academic Press.
- Hunston, S. (2002) *Corpora in Applied Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hughes, D., and Phillips, B. (2000) *The Oxford Union Guide to Successful Public Speaking*. London: Virgin Publishing.
- Kotter, J. P. (2001) What leaders really do. *Harvard Business Review*, 2001, 3-12.
- Locker, K. O., and Kaczmarek, S. (2013) *Business Communication: Building Critical Skills 6th Edition*. NY: McGraw-Hill Education.
- Maes, Jeanne D., Weldy, Teresa G., and Marjorie L. (1997) A managerial perspective: Oral communications competency is most important for business students in the workplace. *Journal of Business Communication*, 34-1, 67-80.
- Mayfield, J., Mayfield, M., and Sharbrough, W. C. (2014) Strategic vision and values in top leaders' communications: Motivating language at a higher level. *International Journal of Business Communication*, 52-1, 97-121.
- Nakatani, Y. (2010) *Improving Oral Proficiency through Strategy Training – Focus on Language Testing, Learners' Corpus and Cognition*. Saarland, Germany: Lambert Academic Publishing.
- Nakatani, Y. (2016) Exploring business communication strategies based on CEFR. *International Journal of Languages, Literature and Linguistics*, 2-3, 86-89.
- 中谷安男 (2010) 「国際ビジネス英語到達目標に関するインタビュー調査—CEFR-Jの質的検証への考察」『東京理科大学紀要 (教養篇)』42, 91-109.

- 中谷安男 (2016) 「ビジネスパーソンの英語プレゼンテーション・コーパス分析: CEFR上位者の目標設定に向けて」『国際ビジネスコミュニケーション学会研究年報』75, 25-33.
- 中谷安男 (2020a) 「オックスフォード大学におけるリーダーシップの学び方」『経済志林』88-1・2, 97-123.
- 中谷安男 (2020b) 「オックスフォード・ユニオンと大学のディベート組織におけるエスノグラフィー調査: 世界のリーダーを輩出するシステム」『経済志林』88-1・2, 125-157.
- 中谷安男 (2021a) 「グローバルリーダーによるコミュニケーション・ストラテジーの検証: オックスフォード・ユニオンとチャーチル」『経済志林』88-4, 173-200.
- 中谷安男 (2021b) 「ディベートにおけるコミュニケーション戦略: オックスフォード・ユニオンとグラッドストンの分析事例」『経済志林』89-1, 1-31.
- 中谷安男 (2022) 『オックスフォード世界最強のリーダーシップ教室』中央経済社.
- 中谷安男 (2023) 「女性リーダーのコミュニケーション戦略: オックスフォード・ユニオン及びTED Task 分析の示唆」『国際ビジネスコミュニケーション学会研究年報』82, 3-10.
- Nakatani, Y. (2023) Enhancing English debate instruction through scientific methods: Utilizing corpus analysis with concordance software. In Bajpai, C.S., Paul, R., Rai, P., and Singh, A. (Eds.) *Technology Integration in Higher Education: Opportunities and Challenges* (pp. 132-145). Delhi: NLU Press.
- Nelson, M. (2006) Semantic associations in business English: A corpus-based analysis. *English for Specific Purposes*, 25-2, 217-234.
- 佐藤博志 (2017) 「大学入試制度改革の課題と展望—諸外国及び国際バカロレアとの比較を通して—」『日本教育経営学会紀要』59, 46-55.
- 嶋内佐絵 (2012) 「日本における高等教育の国際化と「英語プログラム」に関する研究」『国際教育』18, 1-17.
- Walter, D. (1984) *The Oxford Union: Playground of Power*. London: Macdonald.
- 吉原英樹, 岡部曜子, 澤木聖子 (2001) 『英語で経営する時代—日本企業挑戦』有斐閣.

付表1 OUDCのワードリスト

| Rank | Type | Freq | Range |
|------|-----------|------|-------|
| 1 | the | 1891 | 21 |
| 2 | to | 1235 | 21 |
| 3 | of | 1126 | 21 |
| 4 | and | 1092 | 21 |
| 5 | that | 807 | 21 |
| 6 | a | 772 | 21 |
| 7 | in | 668 | 21 |
| 8 | I | 629 | 21 |
| 9 | is | 617 | 21 |
| 10 | it | 536 | 21 |
| 11 | you | 497 | 21 |
| 12 | we | 493 | 21 |
| 13 | this | 389 | 21 |
| 14 | for | 351 | 21 |
| 15 | are | 312 | 21 |
| 16 | have | 274 | 21 |
| 17 | be | 257 | 21 |
| 18 | they | 255 | 21 |
| 19 | as | 250 | 21 |
| 20 | not | 246 | 21 |
| 21 | on | 244 | 21 |
| 22 | he | 224 | 17 |
| 23 | but | 209 | 21 |
| 24 | with | 207 | 21 |
| 25 | was | 198 | 21 |
| 26 | what | 196 | 21 |
| 27 | 's | 194 | 14 |
| 28 | so | 192 | 20 |
| 29 | about | 172 | 20 |
| 30 | churchill | 166 | 8 |

付表2 OUディベーターの特徴語分析結果上位30位

| Rank | Type | Freq_Tar | Freq_Ref | Likelihood | Range_Tar |
|------|-------------|----------|----------|------------|-----------|
| 1 | we | 493 | 3001 | 793.687 | 21 |
| 2 | you | 497 | 4775 | 480.494 | 21 |
| 3 | I | 629 | 7451 | 442.938 | 21 |
| 4 | that | 807 | 11623 | 391.06 | 21 |
| 5 | this | 389 | 4382 | 296.697 | 21 |
| 6 | thank | 66 | 66 | 282.898 | 21 |
| 7 | motion | 50 | 30 | 245.849 | 14 |
| 8 | proposition | 42 | 17 | 224.06 | 16 |
| 9 | is | 617 | 10454 | 199.294 | 21 |
| 10 | tonight | 49 | 58 | 198.844 | 12 |
| 11 | think | 111 | 672 | 178.884 | 19 |
| 12 | poi | 25 | 0 | 174.913 | 15 |
| 13 | people | 145 | 1214 | 166.4 | 20 |
| 14 | it | 536 | 9414 | 155.715 | 21 |
| 15 | to | 1235 | 27174 | 153.24 | 21 |
| 16 | debate | 46 | 100 | 146.059 | 14 |
| 17 | do | 158 | 1574 | 144.611 | 20 |
| 18 | so | 192 | 2181 | 144.069 | 20 |
| 19 | what | 196 | 2264 | 143.092 | 21 |
| 20 | okay | 35 | 43 | 140.218 | 7 |
| 21 | profit | 35 | 47 | 135.859 | 3 |
| 22 | inequality | 30 | 26 | 134.149 | 5 |
| 23 | money | 72 | 383 | 129.896 | 11 |
| 24 | say | 90 | 616 | 128.842 | 19 |
| 25 | morality | 28 | 24 | 125.599 | 8 |
| 26 | are | 312 | 4905 | 122.231 | 21 |
| 27 | ashamed | 23 | 13 | 114.625 | 7 |
| 28 | opposition | 35 | 75 | 111.884 | 17 |
| 29 | moral | 39 | 105 | 111.108 | 8 |
| 30 | actually | 47 | 177 | 109.581 | 13 |

付表3 youのクラスター表現上位20

| Rank | Cluster | Freq | Range |
|------|------------------|------|-------|
| 1 | you very much | 14 | 8 |
| 2 | you have to | 5 | 2 |
| 2 | You'll see | 5 | 1 |
| 2 | you my president | 5 | 5 |
| 5 | you didn't | 4 | 3 |
| 5 | you don't | 4 | 2 |
| 5 | you know it | 4 | 3 |
| 5 | you vote for | 4 | 1 |
| 5 | you want to | 4 | 4 |
| 5 | you 've got | 4 | 2 |
| 11 | you become a | 3 | 2 |
| 11 | you could not | 3 | 1 |
| 11 | you know I | 3 | 3 |
| 11 | you know we | 3 | 2 |
| 11 | you that we | 3 | 3 |
| 11 | you to think | 3 | 2 |
| 11 | you to vote | 3 | 3 |
| 11 | you walk out | 3 | 2 |
| 11 | you're gonna | 3 | 1 |
| 20 | you and I | 2 | 2 |
| 20 | you and you | 2 | 2 |
| 20 | you are asking | 2 | 1 |
| 20 | you are immoral | 2 | 1 |
| 20 | you are in | 2 | 2 |
| 20 | you are saying | 2 | 1 |
| 20 | you as a | 2 | 2 |
| 20 | you can't | 2 | 1 |
| 20 | you can write | 2 | 1 |
| 20 | you can't | 2 | 2 |
| 20 | you couldn't | 2 | 2 |

Implications of Logic and Expression Courses for Business English: An Analysis of Oxford Union Debates

Yasuo NAKATANI

《Abstract》

The importance of fostering “logic and expression” in English education in Japan is currently being emphasized, and has been explicitly incorporated into the guidelines of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT). However, it remains unclear what specific learning methods should be employed in Japan to cultivate logical English expression. One proposed approach is the early introduction of English debates for Japanese learners. Debate activities require various skills and are considered an optimal learning method for developing learners' logical thinking. If appropriately implemented, debate activities are expected to improve English proficiency. However, there has been no in-depth research on specific debate training methods. Therefore, the aim of this study is to provide suggestions for the kind of English debate training that should be implemented in Japan to cultivate the communication skills (CS) necessary for global business negotiations. To this end, the current study investigates the learning methods of the Oxford Union (OU), the world's largest debating society. Specifically, formal debates will be transcribed into text data to create a corpus. From this corpus, we will extract effective training methods for beginners. This will offer insights into effective learning strategies and the practical application of CS for Japanese business professionals and English learners.

